

第5章 研究の枠組み

本章では、実証研究フレームワークをもとに理論研究としてリーダーシップ論、ソーシャル・サポート、レジリエンス、バーンアウトに関する先行研究のレビューをもとに研究の枠組みを示す。

社会構成主義は論理実証主義と対する理論とされるものの、杉万(2005)によると社会構成主義は物理的制約を否定しているわけではなく、研究スタンスとして現象を把握し、実践の対象とする段階においては論理実証主義との違いはない。現象把握し、実践を相対化する段階において、現象把握の改訂が重要になる。この点は論理実証主義において過去の現象把握の不完全さ、誤りを意味するとしている¹⁵⁷。

以上のことから、本研究における社会構成主義の取り扱いについては、杉万(2005)による「行為(認識を含む)とその対象は、ことごとく集合流¹⁵⁸の一コマであり、集合流の一コマとしてしか存在しない」というスタンスに立ちながら、理論モデル構築を行いたい。

組織における関係性を能動的に構築するためには、これを促進するリーダーシップの存在の有効性が高いと予測される。この関係性構築力を関係性リーダーシップの観点から当該モデルに構成概念として取り込みたい。

組織の中の多様なステークホルダーを調整し、組織メンバーのモチベーションを高めるためには社会的なサポートの存在が必要であると予想される。本稿では、これらにコーディネーション力を含意した形でソーシャル・サポートとして当該モデルに構成概念として取り込み、これを中間変数としたい。

また、これら多様なステークホルダー間の調整の実践の結果、地域包括ケアに参加する各組織のメンバーの精神的回復力、しなやかさ、頑健性等々が形成されて、このことを通じて地域包括ケアのステークホルダーのサステナビリティ(持続可能性)が向上されると考える。そこでこれをレジリエンスとして当該モデルに構成概念として取り込み、これを第一目的変数としたい。

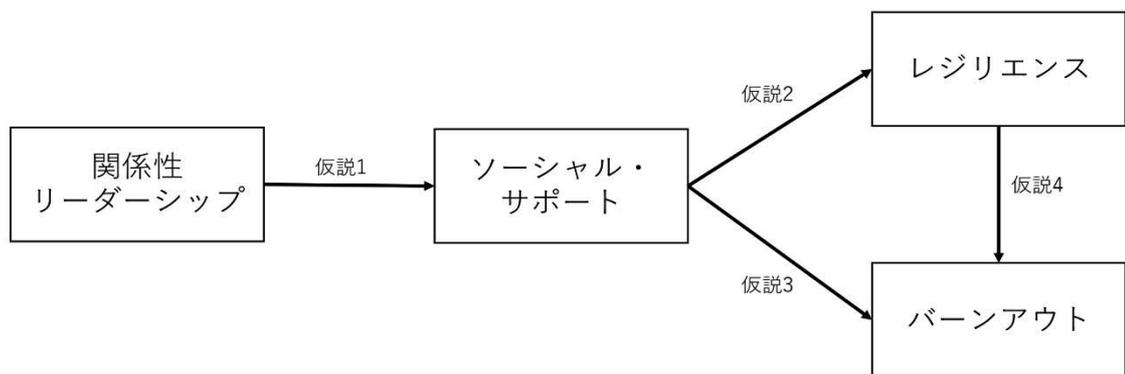
¹⁵⁷ 杉万俊夫「社会構成主義と心理学-『内なる心』の観念を超えて」下山晴彦編著『心理学論の新しいかたち』誠信書房(2005) pp. 65-66

¹⁵⁸ 集合流とは、集合体の動態であり、集合体とは何らかの全体的性質を有する人間たちとその環境の総体である(杉万、2005、p. 66)

地域包括ケアが有効に機能していればそこに参加する各メンバーのストレスは適切にコーピングされるだろうと予測する。そこでこれをバーンアウトの抑制として当該モデルに構成概念として取り込み、これを第二目的変数としたい。さらにバーンアウトの抑制因として、レジリエンスの有効性を探求する。そこで当該モデルに構成概念として取り込んだ。

以上、上記をグラフィカルに表現したモデルが図表 27 である。

図表 27 理論モデル



理論仮説 1: 関係性リーダーシップが高まれば、ソーシャル・サポートが醸成される

理論仮説 2: ソーシャル・サポートが醸成されれば、レジリエンスが向上する

理論仮説 3: ソーシャル・サポートが醸成されれば、バーンアウトが抑制される

理論仮説 4: レジリエンスが向上すると、バーンアウトが抑制される